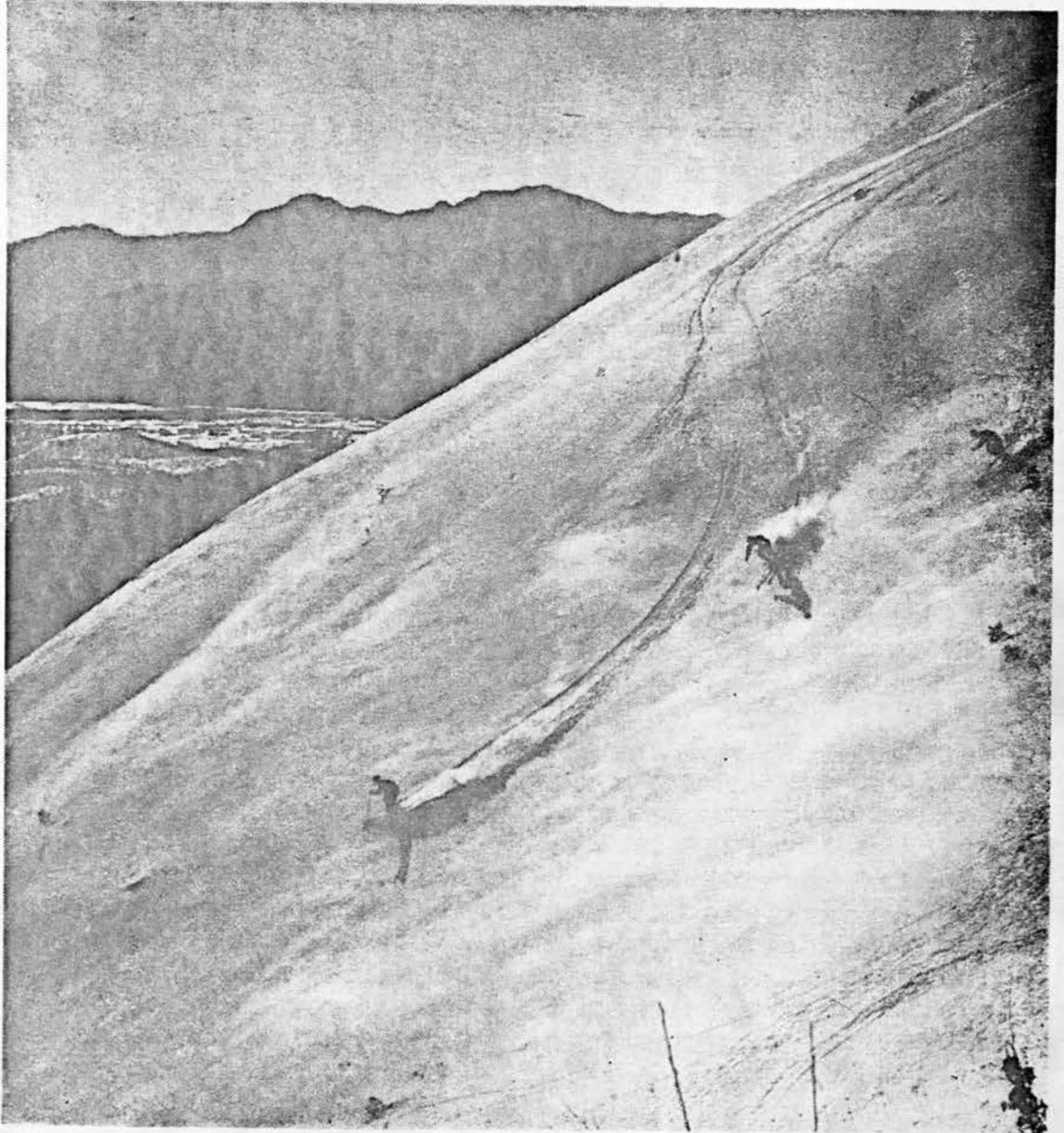


毎月1回25日発行

第3種郵便物認可(昭和35年7月26日) ㊦

# 山と博物館

第 6 卷 第 2 号 1961年2月25日 大町山岳博物館



大町市居谷里にて

撮影 山本携挙氏

# 地方博物館のありかたを再検討しよう

鶴田 総一郎

全国的あるいは広地域対象の博物館に対して、この地方博物館という言葉がよく使われているが、実のところその概念は決してはっきりしたものではない。そこで、ここでは、地方博物館の意味を欧米でいう「Community Museum」直訳すれば地域社会博物館と限定し—当然このように発展しなければならぬという意味も含めて—これについて論じたい。上述の漠然とした地方博物館という意味には、Provincial Museum, Municipal Museum (必ずしも市立とか公共とかだけを意味しない) Local Museum 等の言葉があるが、それぞれ多少の語義の違いはあるにしても、地域社会にはっきり立脚したものという点では何れも欠けるところがある。最も望ましい姿は Community Museum であるというように移行している。

さて、上述の限定された意味での地方博物館のありかたの根本は何であるかという、言うまでもなく地域社会のための博物館ということである。

地域社会のためということになれば、当然その博物館が対象とする地域社会が何であるか、或いはどの範囲を地域社会とするかがもう一度検討されなければならない。この点で明確に地域社会を把握して事業を実施し計画を進めている地方博物館は、残念ながら日本においてはまことにすくない。せいぜい何某市立なるが故に何某市という行政区劃を対象地域とするという程度である。

ここに**第一の問題**がある。即ち、現在ある博物館の最大収容能力(ある瞬間における)と年間最大収容能力および地域社会の対象層のその館を利用することが望ましい最低回数を押えれば、当然対象となし得る地域の大きさとその館の大きさ(建物ではなく機能すべてについて)の間の適否関係ははっきりする。従って前述のように対象地域について再検討された後では、現在の博物館を基準にすれば、対象地域が広すぎるとか、適当だとか、或いは狭すぎて広げる余地があるなど、直ちに一つの結論が導き出せる筈である。日本の地方博物館について言えば、先ずこの点から再出発しなければならない。

**第二は**、地域社会の実態を把握することである。ほとんどの博物館でこれを把握していない。すくなくとも地域の人達の年齢別構成、職業別構成、学歴別構成などは



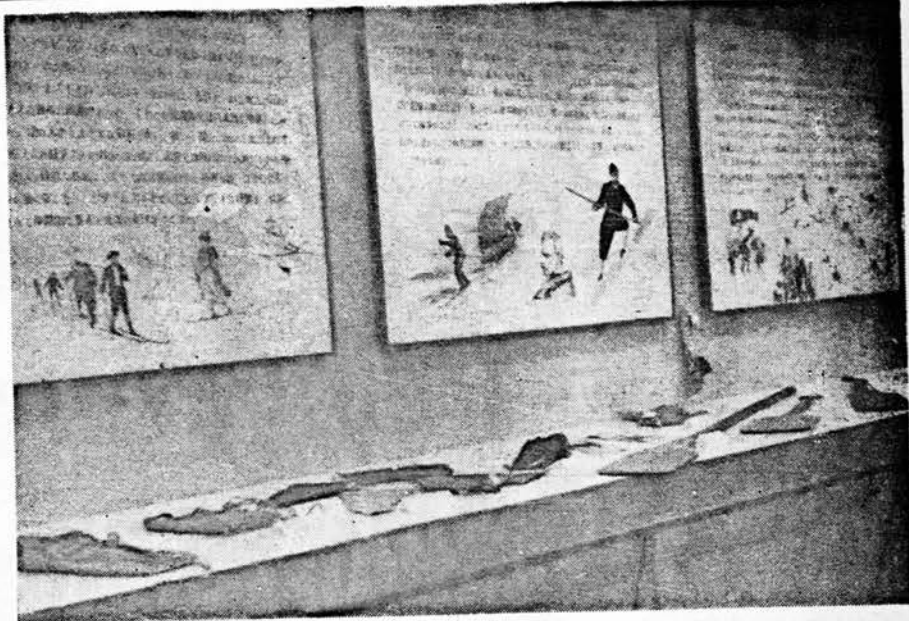
市民研究登山 (山博)

特に博物館などでやらなくても国勢調査その他の社会調査の結果が多少の差こそあれ、地方行政単位ごとにある筈である。このような資料をもとにして、博物館で対象とすべき地域社会人をこの中から抽出し、これについて必要な実態調査をすくなくとも毎年一回は実施すべきである。特に強調したいのは、入館者調査をまとめてそれを直ちに地域社会の人々の動向であるとする失敗をしないようにということである。博物館の事業の第一歩は、そして最も本質的な仕事はまず博物館に来てもらうことである。来館した人、入館した人、これは既に第一歩を進めた人達であり、いわば博物館側の人達である筈である。一回来館した結果面白くなかったので次からは見えなくなったなどというのは、博物館の恥である。

問題は利用してもらおうべき社会人層でありながら、未だに利用してくれていない人達、第一歩も踏み出していない人達である。この未開拓分野をどう開拓するかほとんど博物館での問題である。しかもこの未開拓分野の人達が何を考え何を望みかつなぜ来館しないかについてがっかりとした実態調査をした博物館が果して何館であろうか。この検討なしに地方博物館のありかたを検討し、よりよい地方博物館にすることはほとんど不可能である

**第三には**その館独自の教育基本計画がなければならぬ。学校教育に教育基本法、学校教育法、学習指導要領各科指導のカリキュラムとはっきりした体系が実際的な指導面に到るまでつくりだされているように、その博物館の設立の趣旨に添って、当然博物館教育基本からはじまる指導細目までの一般教育体系が建てられるべきである。

これなしには地域社会の人達をどのように教育し、どのようにあるべき姿に高めて行くのか見当も方法もわからない筈である。ところがこれがつくられていない特に教育評価の面では全く零とっていい。事業のしっばなし、教育のしっばなしである。これで地域の人達から、必須所要施設だと博物館を擁護してもらいたいなどと都合のいいことを言っても所詮無理である。



展示室の一部、雪具とスキー発達史 (山博)

第四には、博物館という建物の中での教育が博物館の教育の本来の姿であるというような固定的な観念を今直ちに捨てるべきである。つまり、店を構えてお客を待っている大時代的経営が現在 Commercialism 系のどこにも残っていないことが、その古さと遅れと時代感覚のずれを端的に物語っている。館外活動、すすんで地域社会にぶっかって行く活動、これなしには速からず博物館自身がこつと品になってしまうであろう。もうすこし具体的にいうと、その博物館を中心に博物館網をはりめぐらし、要所要所に Agent をおき、博物館はその心臓に当る役目をすべきである。換言すれば、そのような館外組織(特に強力な人の集り)を常に把握しておくべきである。

第五に言えることは、一つの博物館単独で事業を実施し、能事終れりとする時代は既に過ぎ去ったということである。地方博物館は規模の点その他に制約があるため特にこの点が著しい。よろしく博物館群で次元高い強力な博物館事業を推進すべきである。これには同系統の博物館による内容の充実という面と多系統の博物館による総合事業の二方面が考えられ、この双方を進めることでより完全な群活動ができる。

そして最後に言えることは、博物館人がもっと自分の仕事、自分の使命に信念を持つということである。極端ないい方をする———当り障りがあったらお許し願いたい———博物館の学芸員自身が、博物館教育に自負も信念

ももたず、従って使命に徹するという燃えるような情熱ももたずにて、どうして来館者側が能動的になりさらに燃え上って来ようかと敢えて言いたくなる。そしてこの学芸員の固い信念とたゆまぬ努力如何が実は地方博物館のありかたを決定的に左右する最も本質的な問題である。実務は何とでもやれるものであり、古い言葉であるが至誠天に通ずで本当にまじめに努力し、ぶっかって行って打開できない問題は無い筈である。己れを顧みて他を言い、自分が信念に欠けている点を隠すために制度が、予算が、社会人がと外に理由を求めるうちは決して博物館はのびない。特にこの種の努力、あるいは怠慢に対して敏感に反応する地域社会を相手にしているのでなおさらである。

(自然教育課次長)

### オオハクチョウ来る

1月20日の朝、仁科三湖の1つ木崎湖にオオハクチョウが飛来しました。

1羽だけがカモの群に混って遊泳しております。博物館では早速周囲の猟師、区民に保護するよう呼びかけております。今では「海ノ口少年グループ」が中心になって、銃などの音もなるべくさせないように、又エサを与えて、来年にはより多く飛来するようになりたいとはり切っております。オオハクチョウが飛来したことは実に12年ぶりのことで当時の1羽が昨年まで駅前の禽舎で旅行く人々を慰めて来たことは周知の通りです。

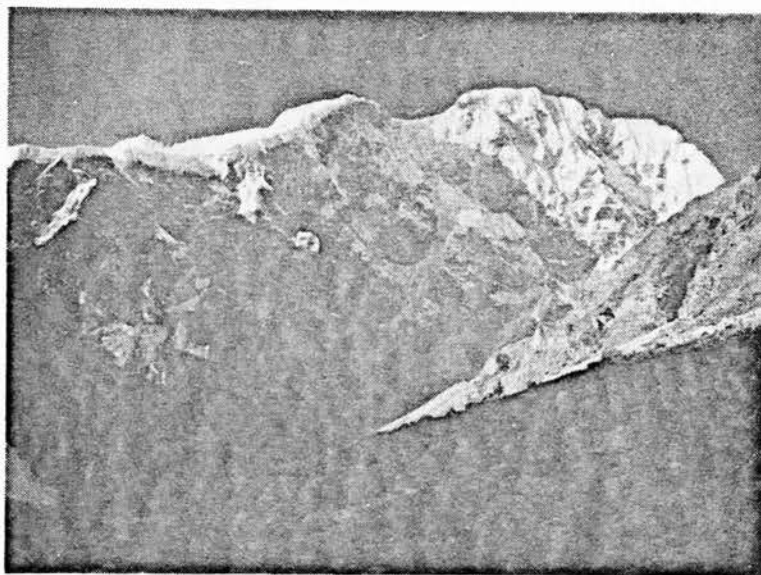
## ヒマラヤ雑観

余り上品でない話

北城節雄

☆ヒマラヤは遠いところではない  
出発ぎりぎりまで心配させられた  
インドへの入国査証がやっと手に  
入り8月19日10時頃船はどうにか  
神戸の埠頭をはなれてくれた。

4月渡航審議会の許可がおりてより  
昨日まで全く目のまわるような  
忙しさであったが、どうにかこれ  
は本物になったらしいという感じ  
がしてくる。もうここまで借金の  
さいそくや集金にやってくる奴は  
いない。つい先日まで少い金を出  
来ただけくいのはすべく遠征に必  
要な品物の寄附をあおいで悪口や  
皮肉にまで最敬礼をして歩いた頃  
にくらべると何とこの空気のうち  
まいことだろう。この船の胴腹の中



サルパチョメ(6,700m)の東壁

には苦勞してかき集めた我々これ  
から6ヶ月の生活の支えになる装備食糧がつみこまれて  
いる。しかしそのすべてはたった1トンと少し余りだ。  
我々は装備はともかくも食糧は徹底的に少くしてしまっ  
た。マナルス隊の人達がこんなのをみたら仰天すること  
だろう。カトマンズより山の麓までのキャラバン中はおも  
ろんベースキャンプでの食糧は完全に現地調達とする  
ことを方針とし高い氷の上の生活だけに日本より持参す  
る食糧をあてることにした。それはアルファ米を中心と  
するものであった。しかしそれも全部で三百六十食分だ  
け、我々六名とシェルパ5名ローカルポーター3名政府  
連絡官1名の計15名で食べることになる1人の分け前  
はたった24食、8日分であった。残念ながら我々はこれ  
以上の食糧を準備するためには資金が乏しすぎ又重量が  
増すとその運搬のためのポーター費もますますということ  
でがまんしなければならなかった。

だがいざネパールに入りこんでみるとこれでも結構がま  
んでくるものであることがわかった。現地食は決してう  
まくはない。しかし我々はボロボロの砂まじりのネパ  
ール米をカレーで流しこみ小麦の粉を練って平たくし羊の  
油であげたチャパティに塩をつけてかじって歩いたが決  
定的な栄養失調となることはなかった。生活がここまで  
おちると胃袋も腸もいじらしい程の働きをしますもので  
ある。こんな食事をつづけた後には日本の山ではどうも  
うまくたべられないカンズメもすばらしい御馳走となっ

て胃袋の中に吸いこまれる結果ともなったのである。も  
っと徹底すれば高処のアルファ米もチャパティで代用  
できないこともない。そうすれば日本より食糧は何も持  
っていかなくともよい訳でそれでも決してまいることは  
ないと思う。ついでにもっとおちて考えよう。我々は船  
は二等でいったが暑さに耐えられるなら三等で十分だ。  
もっと儉約したければ甲板にゴロ寝をしていくデッキ・  
パッセンジャーとしていけばたった3000円でOKだ。  
装備も冬山にいったことのある人ならそのまゝの仕度で  
いけば、まづ6000m級の山だったらそんなに困ることも  
ないだろう。こうかんがえるとヒマラヤなんか決して遠  
いところではない。

## ☆キジウチのこと

山での野グソは文句のつけようのない気持のよさがある  
しかしせまっ 苦しい罫の中で壁にあげられた小さな穴より  
外をのぞきながらの作業も案外落着けてよいものである。  
ところがネパールの普通の家にはこの便所というや  
つがない。我々はカトマンズよりトリスリ河ぞいに続く  
国道ともいうべきチベットとの主要な交易道路にそって  
進んでいった。この国道も実に貧弱なものでせいぜい人  
1人通れるだけの道巾しかなく時には田の畔がそれであり  
河端にでると靴をぬいで対岸まで渡らなければならず  
ある時は田んぼの泥水の中に吸収されてしまっているこ  
ともあるといった調子のものだ。この道にそって部落が

存在しているのであるが、それは病気を恐れ、なるべく標高の高いところに建てられている。我々がこうした部落に近づくとまづ歓迎されるものは部落に入る道の両がわにきれいに並んでいる巨大な野グソの群である。誰かがクソ街道といったが将にその通りで、それはヒエヤトウモロコシの残骸から形成されて乏しい栄養の吸収しつくされたそれにはハエもみむきをしない程である。彼等を朝になるとまづ小さな素焼やシンチュウのツボに水を入れそれをささげ持って部落を出はづれた道端に出張をし誰かまうことなくキジウチのかまえに入るのであるヒマラヤおろしの涼しい風にその尻がなでられる時彼等は目を細めてシバの神をおもうにちがいない。だがその後がどうもただけでない。彼等には紙というものはない紙は実に貴重なものであり、カトマンス周辺で日本の和紙のようなものが少しつかわれているだけである。そこで後しまつに使われるものが小さなツボの中の水なのである。左手の掌に水を流しこみそれで残物を整理して一切が終るのである。その残骸は乾燥した空気にさらされたちまちま乾ききり風とともに去ってしまうわけであるだから彼等にとっては左手というものは不浄のものであり手づかみで食べる食事には必ず右手を使うのである。我々がなんの気無しに左手でタバコを与えたり子供の頭をなでることは彼等の人格をすこぶるきずつけることになるのである。これだけはついにガラの悪い我々も真似ることは出来なかったが持の悪い人にはよいにちがいない。キャラバンが終りいよいよ5千米以上の氷雪の上の生活になると排泄作用も仲々楽ではない。夜は冷るのでしばしば小便のためテントよりはよい出さねばならんがこれが全く重労働で作業の前にしばらく呼吸調整をしないとだめである。ましてこれが吹雪の日となるとまったくみじめである。しかしからりと晴れた朝、日の光をいっ



#### 糸をつむぐ女と甲状腺の巨大なコブ

はいにあびて雪原のおもいおもいのところに足で雪を除きやがみこみ7千米の山々を仰いでする作業は実に壮快そのものである。因るのは水瀑の中などザイルで結び合って行動している時この生理的欲求が起ったときである。ルートを一歩はづれるとそこには無数のクレバスが暗黒い口をあけているので姿をかくすことも出来ず仲間に見まもられてする作業は後味の悪いものである。

#### ☆ヒマラヤは生きている

シエルハ問題で予定より半月あまりもおくれてランタン村に入った頃はまだモンスーンの雨は完全にはあがらず午後になるときまったように雨が降り出すという天候がつまっていた。10月7日に氷河の末端にベースキャンプを張りポーターに1日250円の日当をはらうと彼等はこんな寒いところはまっぴらだとそくきと帰っていった。我々15人だけの生活がはじまったのである。

次の朝一面に霜のおりた河原にはい出てみると珍らしく晴れあがった空にもすごい氷の峯が突きあげているこれが目ざすランタヒマールの主峯ランタンリルン(7245米)だったのである。それはまったくすごい姿であった。我々のキャンプに面する東側はほとんど垂直に切れ落ちている2500m近い岩壁となり、その上はナダレに洗われてキラキラ光る水の斜面が続きそこにはやまとまづわりついている雪の刃物のようなヒマラヤヒダが発達している。その頂上は仰ぐと本当に首が痛くなる程のところにある。まったく高い。このベースキャンプの標高が3800mリルンの頂上が7245mであるから実に3500m近い標高差があることになる訳でそれはぐつと頭の上においかにぶさってくる。我々の口からはたゞ「すごいなあ」という言葉だけだった。この岩壁を遙か上から氷がくづれ落ち高速度で撮影をした映画でも見ているかのように真白い雪煙が長い時間かかってすべりおちてくる。我々はその音によってナダレに気がつきそれから



ジュ・ガールヒマールを背にキャラバンは行く

悠々カメラをとり出し望遠レンズをつけかえて構えてもまだナダレは下に達していない程だ。やがてモンスーンの雲が谷をうめその麓をおおいかくす頃にはその頂上からものすごい雪煙があがりたえまないナダレの音と相まって荒々しく形成されつづけている生き生としたヒマラヤの姿を身近にかんずるのであった。私はこのヒマラヤのポリユウムによって完全に圧倒されてしまった。そしてこのものすごい創造物にむかって何だか手を合わせておがみたいような気持ちになってしまった。頂上をきわめようなどという気持はいつの間にかなくなっており、ヒマラヤに挑戦するとか、いとむなどという言葉はここでは通用しないものであることを知ったのだった。

サルバチヨメに攻撃を開始しその氷壁、クレバス、ナダレの中でのひと月近い生活は決してたのしいものでは

なく第三キャンプの前にそびえていた400m近い氷壁にとりついてみてそれぞれの恐ろしさをさんざんに味わされた。

ほんの巾数米のクレバスでも我々の力では何ともしようがなかったのである。頂上を目の前にし登行をつづけている時も、こうした障害が突然あらわれ我々の行動がゆきづまるのではないかということの心配がたえず頭からはなれなかった。そして頂上に立っても真先に感じたものは苦しいラッセルの仕事から解放されたほっとした気持ちであり、次にはすぐ帰りのルートが心配になるといった状態であった。ヒマラヤは最後まで気のおけない恐ろしいものであった。(ランタン・ヒマール遠征隊員・  
鼎町中学校)

## 「山岳名を冠した植物」の補遺と訂正

横内 齊

友人寺島虎男氏が、本誌の5巻の3号、4、5号合併号、6号、7号、8号の5回にわたって「山岳名を冠した植物」という題下に掲載されたものを、私も著者から寄贈を受けたが、二、三訂正する所もあり、また付加えるべきものもあるので以下に列記することにした、番号などは寺島氏の記載に従った、(特徴などは略した。)

### A、日本北アルプス(飛騨山脈)

#### ④ 御嶽

3. ミタケガヤ 本種は御嶽で発見されたものではない、ミタケという山名は各地にある、例えば甲州のミタケ、武州のミタケというように、でこれは除く、
4. ミタケガヤ これも前種と同一の理由で除く、
6. オンタケマメザクラ Prunus *Ontakensis* H.Koidzumi ばら、サクラ
7. オンタケナナカマド Sorbus × *Yokouchii* Mizushima ばら、ナナカマド
3. オンタケシャクナゲ *Rhododendron ondakensis* Koidzumi nom illeg. つつじ、シャクナゲ
- C、八ヶ岳山脈
8. ヤツガタケイチゴ *Rubus idaeus* L. subsp. *nipponicus* Focke var. *nipponicus* var. *marmoyatu* Hava ばら、キイチゴ、シナノキイチゴの異名

### D、日本南アルプス(赤石山系)

8. キタダケソウ *Callianthemum hondoense* NAKAI et HARA きんぼうげ、キタダケソウ
9. キタダケデンドロ *Woodsia kitadakensis* OHWI うらぼし、イワデンドロ

#### ④ 三伏峠

1. サンプクリンドウ *Aconitum hakusanse* Nakai りんどう、リンドウ
- ④ トヨグチウラボシ *Lepisorus clathratus* CHING var. *Namegatae* KURATA うらぼし、ノキシノブ

### C、白山火山脈 白山

18. ハクサントリカブト *Aconitum hakusanse* Nakai オタマキ トリカブト
19. ゴゼンタチバナ *Chamaepericlymenum Canadense* ASCHERSON et GRAE-BNER みずき、ゴゼンタチバナ 白山の高峯、御前峯にちなんで命名されたもの

○以上気のついたものをあげた、他にお気づきの方は訂正されることを願います。

# 長野県山岳連盟結成の動き

## 準備委員会発足

長野県に山岳連盟の必要性が叫ばれて久しいが、漸くにして結成される見通しが確実になった。

現在、県岳連の結成されていないところは石川県と長野県だけで、特に本邦の著名な山岳の大部分を有する本県に岳連が未組織であった事はあらゆる面でマイナスの点が大であった。

本県は山岳県であるにもかかわらず、どういふものか名実兼ね備わった優秀な山岳団体が育たなかったようだ。本来ならば、最も広い地域にわたって優秀な会員を有する日本山岳会信濃支部あたりが、音頭をとって結成に動きだせばもっと早い時期に結成されていたと思うのだが、どういふものか積極的に動こうとせず、結局、後述するグループ・ド・モレーヌが行ったアンケートが中心となって、積極的に賛意を表明した団体のうち、各地域を代表した形で、前にG、D、M、松本の日本山歩クラブ、木曾山岳連盟、大町山の会の代表が一月下旬、大町において会合をもち、県内の山岳会の動きと、県岳連結準備会を開き、以後の活動を積極的にすすめることに意見が一致したので、とりあえず前に4団体が準備会の発起人という形で県下の山岳団体へ趣意書を送って呼びかけ、2月12日、松本において準備会を開催した。この準備会には29山岳団体が参加し、そのうち14山岳団体が賛意を表明した。他山岳団体は岳連に対する認識不足から情勢把握の為代表を送ってきたもので、賛意は得られなかったが、必ず参加して貰えるとの見通しのもとに賛成14山岳団体で準備会を準備委員会に切り替え、3月26日発足を

目標に準備をすすめる事になった。

## 問題点

岳連が結成される場合の問題点はいくつかあるが、当面残る大きな問題は、前記信濃支部に対する問題と、事業面、特に経費の問題だろう。

現在信濃支部では、岳連へ加盟するという事よりも、岳連と同等の立場を維持しているが、それはともかくとして、各地方の山岳団体の中には支部の出方を見ていて積極的に連盟に参加しようとしぬ山岳団体があること、もう極一点は、連盟への分担金が年間2千円程度となるが、これが相当な負担となる団体、もしくは、連盟に参加する事によって、それ相応の利益があるかどうか或いは地域的な関係から連盟の事業に積極的に参加出来るかどうか疑問をもつ団体が少なくない為、すべての山岳団体をもって組織されぬ点がある。

## 今後の展望

結局県内約90山岳団体のうち、20前後の山岳団体によって結成される事となろうが、結成される事により、技術の向上はもちろん、知識、見聞も広まり、若いエネルギーが結集されて、小さな地方の団体だけでは実現出来なかった夢が実現されるだろう。各都道府県岳連との交流の道も開かれ、やがてはヒマラヤへの道へ通じる事になろう。又、新聞紙上をにぎわす遭難の予防及び対策にも大きな力を示すだろう。

(文責 大町山の会 久保田稔)

昭和33年12月実施した結果要約すると

- ①長野県内に約90前後の山岳団体があって、その規模も5~130名とまちまちで、平均20名前後であった。
- ②活動状況は、山行、合宿形式もいろいろで、レクリエーション(ハイク)から本格的な冬山合宿まであって枚挙にいとまがないが、山へ登る他に、道標点検、道路開発、遭難救助訓練などえも活動の手を延ばしている団体があった。
- ③会報等も殆どどの会でも発行されていたが、交流がなされていなかった。
- ④県岳連についての意向は

(イ) 早急に結成したいという団体が6団体

(ロ) 研究中の団体がほとんど

昭和35年12月第二回のアンケートを実施した結果によると、

①活動の面では前回のときとほとんど変りなかったが連絡をとりあい、交流のなかから健全な山行を望む声が多くなった。

②県岳連結成については、前の6団体に新しく10団体が、積極、消極の別はあれ賛成グループに加わった。

(反対する団体はなかった)

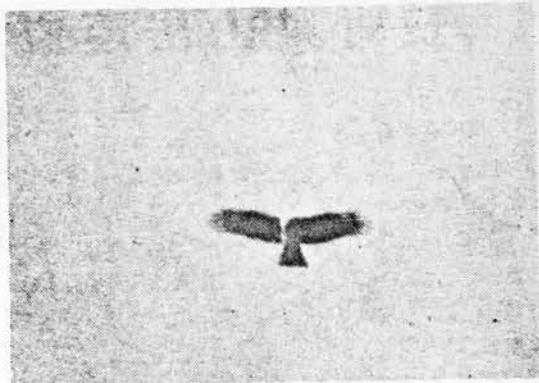
## 県下山岳会の現況

—G・D・Mのアンケートから—

トビ

長沢修介

トビは我々の目にふれる鳥の中でカラスやスズメと共に最も普通の鳥である。大空を輪をえがいて飛ぶ姿は誰しも一度は見たことがあるだろう。そしてあの雄大な姿からは誰でも美しい清潔な生活を想像するに違いない。しかし本当のトビの食生活を見たらさぞガッカリするだろう。姿こそ鳥の王様ワシやタカの類であるが食べているものは汚物、魚の肉片などで実生活は二・三級下のカラス同様である。大きな河川の川尻やゴミ捨場などが主な採餌場であってカラス同様落ちていて食べられそうなものならまず何でも拾う。トビに油揚げの謠は昔からある通り盗み取ることも大得意、他鳥のヒナを失敬したり、養魚池の魚をつかみ取りしたり、はてはヒヨコをさらったりまでする。しかし田畑をカラスのように荒すことはしない。それは動物質が主食だからでかえて田畑にちよろちよろするネズミを取ってくれるので益の方も大きい。又トビには変わった習性がある。全く食物にも縁の遠い布



切れ、縄切れ、紙くすなどを拾い集める。トビの大きな巣の産座には多くのこの様なボロクズが集められている中にはまれに何処の誰の使用したものかまではっきりする様なものが入っていることがある。この様にカラスと似た所が採食地や棲息地のためトビとカラスは昔から不仲の様で行き合おうとよく喧嘩をする。トビ一羽にカラス二三羽が寄ってもつれながら飛ぶ様は良く見かけられる。

友の会行事

**スキー会** は1月29日、大町スキー場へ会員50名が参加して行なわれた。当日は大変混雑し、負傷者が続出したが、幸い会員は誰一人も負傷せず楽しい1日を過ごした。

**雪のちようこく会** は2月4日、博物館前庭で会員35名が参加して行なわれた。丁度木崎湖にオオハクチョウが飛来していたので、それにちなんで、大きいオオハクチョウを作り楽しい半日をすごした。

**冬の星を見る会** は2月11日寒い中にも20名の会員が集まり、公民館庭から、熱心に天体望遠鏡をのぞいて、そのあとストーブにあたりながら「星の神話」を聞いて解散した。

**水鳥を観察する会** は2月19日、木崎湖において会員20名が参加して行なわれた。地上望遠鏡に写る自然のままのオオハクチョウを観察し、熱心にメモをとった。その他の水鳥の鳴声も聞きながら午後1時解散した。

資料寄贈

会報60—12月京都山岳会 山毛榉林NO53、54広岳山の会 山NO340~342横浜山岳会 まどのゆきNO38積雪科学館 金沢文庫研究NO61金沢文庫 Nature Stu-

dy NO612大阪市立自然科学博物館 植物趣味NO76 東亜植物学会 千葉生物誌NO 10, 1, 2 千葉県生物学会 登攀NO250—251東京緑山岳会 会報NO30, 11明峯山岳会 岳友NO54岳友クラブ ホンキーNO37日本モンキーセンター 四つばしNO1, 10大阪市立電気科学館 地質調査所月報NO11, 8地質調査所 大多摩観光情報 NO11大多摩観光連盟 東斐月報NO29~32東斐山岳会 わらじNO34わらじの仲間 地質ニュースNO75地質調査所 自然科学と博物館NO27, 9—10国立科学博物館 ハイカーNO63山と溪谷社 国立公園NO 134国立公園協会 会報NO 30, 12 獨標NO 73, 73, 75, 76獨標登高会 稜友NO39東京北稜山岳会 金沢文庫研究NO62金沢文庫 部報NO159 REPORT NO48, 49, 50東京都庁山岳部 京都山岳(記念特集号) 京都山岳会 兵庫連報NO4 兵庫県山岳連盟 Nature Study NO7.1 大阪市立自然科学博物館 地質ニュースNO76地質調査所 モンキーNO 38日本モンキーセンター 山と溪谷NO262 山と溪谷社 山嶺NO369東京野歩路会 山毛榉林NO55 広島山の会(敬称略)

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料170円(郵送料とも)を現金書留または郵便替為、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。 大町山岳博物館

山と博物館 第6巻第2号 1961年2月25日発行  
発行所 長野県大町市TEL(大町)211  
大町山岳博物館  
印刷所 大町市上中町  
信州印刷大町工場